移住サポートセンターより

函館に移住された方をご紹介します。

函館に移り住んだ「北海道坂本龍馬記念館の期待の新星」

「記念館の新しいステージに向けて、協力してもらえないだろうか。」北海道坂本龍馬記念館の三輪館長から、声を掛けていただいたのは今年初めのことでした。

縁あって記念館建設に向けての活動に出会ったのは、十数年前のこと。それから建設までの間、東京・横浜を中心に、PR活動や募金活動を微力ながら行なっていました。建設後は、私が横浜で生活していたこともあり、記念館とはやや疎遠になっていた中での今回のお誘いでした。

「函館に行ってみたいんだけど、いいかな?」

妻にお伺いを立てたところ、「(自分に)合っていると思うから、行ってみたらいいよ。」

北海道で生まれ、中学・高校時代を札幌で過ごした妻は、そう言って背中を押してくれました。こうして自身初、北海道で生活することが決まったのです。

函館を訪れるのは、約20年ぶり4度目。初めて来たのは、約26年前。そして、過去3回の来函は、すべて夏。伝統の夏競馬、函館記念観戦が主な目的の旅でした。たしか結果は、芳しいものではなかったような…気がします。それはさておき、日本で唯一、スタンドから海が見える競馬場からの風景は、夏の日差しと相まって、鮮やかな眺望だったことを覚えています。また、友人と一緒に食べた穴子(鮨)のとろける美味しさも、忘れることはありません。

もちろん、それだけではありませんが、函館そして北海道に対するイメージは、総じて良いものでありましたし、これはおそらく、関東の人間にほぼ通じるものがあると思っています。

しかし、横浜を発つときに気になることもありました。それは、函館は観光地としての人気は全国トップクラスだが、人口流出に歯止めがかからない、というニュース。よって、今回の函館入りは、期待8割、心配2割といった感じのものでした。

4月1日の夕方、まだ寒さが続く函館空港に降り立ちました。空港からバスで西部地区に向かっている最中、まず思ったことは"あれ、函館って、こんなに寂しい感じだったかな?これまでと感じが違う…"ということだったのです。心配2割が頭をもたげましたが、それは、以前に来たときとは季節が異なるし、冷たい風が吹きすさぶ夕刻だから、そんな風に感じるのだな、と思うようにしました。

そして、函館での単身赴任生活が始まり、街の散策を始めてみますと、私の住む西部地区は、異国情緒が漂い、それでいてどこか懐かしさを感じさせ、郷愁の想いに駆られる場所で、とても心地良い。八幡坂や市電の青柳町付近などは、映画の撮影にも使われるとのことで、風情があり、眺めも素晴らしい。本当に大切にしたい貴重な地域だと、改めて思います。(ついでですが、競馬場も大変きれいになっていました。)

ただ少し残念なのは、あちこちに空き家や空き地が目立つことでしょうか。これは、函館市が抱える人口減という問題に起因しているのでしょうし、ひょっとしたら、この問題が、4月1日の第一印象に繋がっていたのかも…、と思うようになりました。

そこで人口について、少し調べてみました。函館市の人口は、30年前と比べると約5万人減少しています(31万人→26万人)。

比べてみたのは、かつて旅した最もお気に入りの街ひとつ、長崎市。函館と長崎は、共通点が多い印象があります。幕末の開港街、異国情緒、夜景が有名、市電が走る、坂が多い…等々。函館と同じく良いイメージを持つ長崎市の人口(42万人)は、30年前からほぼ横ばいです。

もうひとつ、比べてみたのは大学時代を過ごした街、富山市。市電が走っていることくらいしか、目立った共通点はないですが、30年前の人口は、函館とほぼ同じ31万人。それが、現在は約10万人増加の41万人になっています。

函館と似通っている部分の多い長崎、そしてコンパクトシティを打ち出してきた富山の街から、改善のヒントになることはないだろうか…。そんなことを思います。

もちろん私は素人ですから、具体的な対策を述べられるわけでもありません。しかし、縁あって市民となった函館の街が、ずっと良い街であってほしい、という願いはあります。

これからも、もっと街の魅力を見つけ、もっと街を好きになり、そしてもっと多くの人々にこの街を好きになってもらいたい、と思います。北海道坂本龍馬記念館を通して、少しでもその力になれれば、と考えています。

柳田　善徳